



市民病院

八十ちゃん通信

問合せ
市民病院管理課
☎(48)5050

救急に迅速に対応できる看護師・ 災害に強くなる看護師を目指し、 日々奮闘中

こんにちは。救急看護院内認定看護師の島本敬子と石川博子です。

市民病院は昨年度、年間3,340台、月平均278.3台の救急車を受け入れたことを、皆さんはご存知でしょうか。

このような状況において、私たちに必要な活動は、病院スタッフを中心に救急に関する研修を行うことです。具体的には、まずBLS（一次救命処置研修）です。皆さんのなかにも消防署で行う救命処置に参加した人もいますかと思えます。次にACLS（二次救命処置研修）です。これは病院内で実施する点滴や注射を含むものです。そして最後に病棟スタッフを中心に行うINARS（患者急変対応研修）です。

これは体調が悪くなった患者に対し、先入観にとらわれず、脈拍や呼吸などさまざまな視点から観察を行い、どこに問題が生じているのか探し、患者の状態を安定させるよう、みていく方法を学ぶものです。私たちは、実際の救急の場面でスタッフが活躍できるよう、手助けしながら日々頑張っています。

災害に関しては、災害の備えから応急処置まで、院内での訓練を通して、スタッフに啓もうし有事に備えています。他施設での講座も受けていますので、よろしければ病院までお問い合わせください。



碧南の歴史へのいざない

No.19 明治時代に活躍した、 碧南のお医者さん

写真①は、鷲塚で当時最先端の西洋医学を取り入れた診療所の入口を写したものです。



△①洋々医館（市所蔵資料）

明治5年（1872年）、近藤坦平が28歳のときに「洋々堂」を開業します。彼は幕末の混乱のなか、江戸・長崎で西洋医学を学び、帰郷後、碧南市初の洋式診療所を開きました。

地域医療の発展にも力を入れ、洋々堂と同時に開設したのが私設医学校の「蜜蜂義塾」です。多いときには塾生が84人もいたそうです。公立の医学校が名古屋に出来たため、明治15年（1882年）に廃校となりますが、多くの医者を輩出しました。

問合せ 文化財課内市史資料調査室 ☎(41)4566

明治28年（1895年）、坦平が51歳のとき、娘婿である近藤次繁が海外留学から帰国したのを機に洋々堂から「洋々医館」に名を改めました。このころには洋々医館の評判は三河だけでなく静岡県や長野県にまで届いていて、遠方から患者がやってくるほどでした。

しかし、身内の後継者もなく、昭和40年ごろに廃院となりました。しばらく地域の子どもの遊び場にもなっていましたが、昭和55年（1980年）に建物を取り壊されました。今は多くの住宅が建ち、当時の面影をとどめてはいませんが、医館跡の石碑（写真②）が隆盛時をしるばせてくれています。



△②洋々医館石碑